

領域 8 インフォーマルミーティング・議事録

- **開催日時**：2018年3月24日 12:30-13:30
 - **開催場所**：東京理科大学 K503 会場
 - **出席者**：
 - 領域代表 (任期: 2017/4 - 2018/3)
常次宏一 (東大物性研)
 - 領域副代表 (任期:2017/4 - 2018/3)
吉村一良 (京大理)
 - 次期領域副代表 (2018/4-2019/3)
堀田貴嗣 (首都大理)
 - 運営委員 (任期: 2017/4 - 2018/3)
村川寛 (阪大理), 道村真司 (埼玉大),
岡本佳比古 (名大工), 今井良宗 (東北大理), 速水賢 (北大理)
 - 運営委員 (任期: 2017/10 - 2018/9)
松岡英一 (神戸大理), 下志万貴博 (理研 CEMS),
星野晋太郎 (埼玉大), 品岡寛 (埼玉大)
 - 次期領域運営委員 (任期: 2018/4-2019/3)
深澤英人 (千葉大理), 中島正道 (阪大理), 矢島健 (東大物性研)
山川洋一 (名大理), 川崎郁斗 (兵庫県立大院物質理)
- 13:30 頃の出席者数: 25 名程度 (上記を含む)

1 第73回年次大会サマリー

1.1 講演数

表 1: 第73回年次大会における領域8の講演数 (招待講演, 企画講演含む) .

	口頭	ポスター	合計
低温	190	92	282
磁性	83	77	160
全体	273	169	442

cf) 第71回 (東北学院) 476件, 2016秋 (金沢) 612件,
第72回 (大阪) 513件, 2017秋 (岩手) 512件

- 全体的に発表件数が少ない (全体の発表件数が, 500件を下回ったのは2年ぶり)

1.2 プログラム編成

1. シンポジウム日程

- シンポジウムの件数は原則3件以内とされているが、今回は主催で5件認められた(共催3件)。
- 運営委員による順位づけの結果に基づき、高得点の件から優先的に開催日時を申請時の希望通り決定した。
- 初日午前と最終日を外し、概ね第一希望通りに開催することとなった(第一希望と異なる場合には、メールで提案者に確認をとった)

2. 口頭発表

- 低温と磁性のバランスを考えて配置
- 通常、1セッションが組まれるケースが多い、バナジウム、マンガン、コバルト、パイロクロアなどの発表件数7-9件程度と、1セッションとするには件数が少ない分野が多かった。Mn,Coは前半後半に分けて長めのセッションとした。会場枠に余裕があったので、7件のみの開催も実施した。
- 結果的に、1セッションあたりの発表件数が7-16件と大幅に異なったので、前半後半の間の休憩時間については統一しなかった。
- 超伝導(銅酸化物、鉄系、各2回)は重ならないようにつづけるだけ同じ部屋での開催にした。
- 初日午後から3日目は、全ての時間帯でシンポジウムが開催されたので、最終日午前に一般講演の枠を多めにした。

3. ポスター発表

- ポスター発表は初日45件、2日目124件という指定があったため、低温分野の45件を初日に配置した
- 口頭発表とポスター発表となるべく内容のオーバーラップがないように配置

4. 合同セッションについて

- 他領域との合同セッション(主に低温)は、基本的に、「～番目は領域～と合同」と記載すればよい。
- マルチフェロ：前々回、前回は領域8が主催。今回は領域3と8に件数が適度に分かれていたので、それぞれが担当した(内容に応じて、メールで了承を得て、申請時と領域を入れ替えた例もある)。
- トポロジカル：領域4,8それぞれで開催した。件数としては適度に分配されていた。
- 後日追記：領域3と領域8のマルチフェロのセッションが同日同時時間帯に開催されたため、参加者の一部からプログラムに配慮してほしいとの意見があった

5. プログラム編成会議

- プログラム編成会議は前回同様、4名が参加した(現・次期代表と副代表)。作業は特に問題なくこなせた。

1.3 領域委員会（H29年11月開催）報告

1. シンポジウムについて

- 領域8からは6件のシンポジウム提案があり、5件が採択された。
- 不採択となった1件は、今回から始まったプロジェクト共催型のシンポジウム提案であった。この共催型シンポジウムは全体で3件程度という枠があり、必ずしも評価が低いというわけではなかったが、他領域からの提案も多く、枠の問題で採択できなかった。次回再度申し込んでほしいとの意見もあった。

2. 懇親会について

- 現会長は、学会員の懇親を重視しており、今回テストケースとして、代議員や領域代表の経験者を対象に、初日夕方に懇親会を開催した。
- 将来的には全会員を対象とした会に発展させていきたい。

3. 学生優秀発表賞について

- 全領域で共通した選考基準、あるいは、受賞人数を設けるか、といったものが中心的な議題であった。領域8としてもそういったものを設けてほしいという主張を行ったものの、現在すでに施行している領域からの反対意見が根強く、各領域が独自に行うことになった。
- 物理学会としての学生優秀発表賞に関する実施要項が、12月6日の理事会で決定した（ホームページで見ることができるようになる）。この要項は、基本的な枠組みを定めたもので、詳細は各領域に委ねられている。
- 各領域の規約は、理事会に提出し、承認を得る必要がある。
- 審査員の選出方法は事前に理事会に提出し、承諾を得る必要があるが、実際の審査員の名簿に関しては理事会への提出は事後でも構わない。

4. その他

- 年次大会は、食堂が混雑するために、素核と物性でお昼の休憩時間をずらすという案が出ている。

2 次期領域運営委員（任期：2018/4-2019/3）の紹介

低温: 深澤英人 (千葉大理), 中島正道 (阪大理), 矢島健 (東大物性研)

磁性: 山川洋一 (名大理), 川崎郁斗 (兵庫県立大院物質理)

3 次次期領域運営委員 (任期: 2018/10-2019/9) の推薦および承認

- 各運営委員 (任期: 2017/10-2018/9) からの推薦
低温: 大川万里生 (東理大理), 辻直人 (理研)
磁性: 越智正之 (阪大理), 志村恭通 (広島大先端物質科学)
- 拍手をもって全員承認された

4 学生優秀発表賞について

- 今期学生優秀発表賞担当の速水賢氏より, これまでの議論の確認, 今後の流れの説明, 運営委員が作成した原案の説明がなされた.
- 領域8では, 来年の3月の学会からの学生優秀発表賞の開始を予定しており, 今後のスケジュールが説明された. 具体的なスケジュールは, 今回のインフォーマルミーティングで選考方法や受賞人数などの大枠を決定, 次回の学会のインフォーマルミーティングで規約や実施要領の詳細を決定, 10月の理事会での承認を得て, 来年3月の学会から募集を開始するというものである. このスケジュールに関しては異論はなかった.
- 前回のインフォーマルミーティングまでの経緯が説明された. 前回のインフォーマルミーティングで, 主に議論されていたのが, 特別セッションを設けて審査を行う方式か, 通常セッションにおいて候補者が発表し審査を行う方式のいずれがよいか, ということであったが, 後者が良いという結論となっていた. 今回も念のため, 後者の方式でよいか確認したところ, 異論はなかった.
- 通常セッションで審査を行う方式での具体的な選考方法について, 運営委員が作成した原案に基づいて, 議論を行った. 多くの質問が出され, それに関する議論がなされた. 質問や議論の詳細は, 添付資料記載の通り.
- 今後特に議論が必要となると思われるのは, 本審査員の選考方法, 当日の欠員の対応, 審査結果の回収方法, 最終選考の方法や時期 (添付資料の Q1, Q7, Q8-12, Q13, Q14) である.
- 次回のインフォーマルミーティングで, 理事会に提出する規約の案と実施要領の詳細に関する案を作成し, 議論することが確認され, 終了となった.

以上 (文責: 今井良宗)

学生賞の選定に関する取り決め

[審査前]

1-a 審査スケジュール(具体的な日程は次回の IF で審議する)

- (1) 応募者名簿作成
- *** 年会プログラム作成 **
- (2) 審査員割当て
- (3) 審査依頼メール発送
- (4) (3)の回答集計
- (5) その結果に基づく審査員再割当て
- (6) 再依頼メール発送
- (7) 審査員割当てのリスト確定
- *** 物理学会
- (8) 学会期間中の審査
- (9) 学会中の事故による審査員再割当て
- (10) 審査結果集計
- (11) 候補者選定

1-b 応募書が多数の場合には審査を 2 段階に分けて行う。

- 応募書の送付先
運営委員の ML で受け付けを行い、応募書類の管理は学生賞担当の運営委員が行う

Q1：応募の時期はいつにするのか？

- 物理学会の申し込み時期と同じにする
- 来年の年次大会の申し込み締め切りは 11 月下旬になるので、10 月の理事会までに規約を提出する必要がある

- 応募書類
A4 一枚ほどの概要で様式は問わない。図表は含めてもよい。業績は関連するもののみを含める。

- 審査員の選定(審査員人数と基準)

審査員の基準：応募者の研究室のスタッフが(利害関係のない応募者の)審査員に加わる。ただし、共同研究者に入っている学生の審査からは外れるようにする。

Q2：応募者の研究室のスタッフはどこまでを含むのか？指導教員だけなのか？

→所属する研究室のポスドク、あるいは、助教以上を対象とする。

Q3：研究室のスタッフをこちらで調べるのは大変なので、応募書類に記載してもらったほうがよいのではないか？

→応募書類に記載された共同研究者から判断する。

審査員人数：審査員1名に対し、学生10名程度の審査を行うことを目安に人数を決定する。また、学生一人に対しては3人の審査員が審査を行う。例えば、100人応募の場合、30人の審査員が必要。

- 候補書人数

応募者が15名を超える場合には、事前審査を行い、15名程度に絞る。また、一部の大学や分野に偏らないようにする。

Q4：同一研究室からの応募人数の制限は設けるべきか？

→やらないほうがよいのではないか。

- 審査項目（全体評価のみもあり）と採点区分（何段階とするか）

A. 研究の学術的意義、

B. 完結した研究であるか（発表内容に直接関係するものについてのみ、研究業績を示してもよい）、

C. 文章の明解さ、

を10点満点の計30点満点で評価。

また、「特別に優れた内容である」というチェック項目を設けて、審査員各々2件程度にチェックをつけるようにする。

各応募に対して3名の審査員が審査を行う。

Q5：2名を選ぶだけでもよいのではないのか？

→15人を下回ってしまう可能性も否定できないので、全員分の点数をつけてもらう。点数だけなので、負担はそれほど大きくはならないだろう。

Q6：一次審査の審査結果は応募者に通知するのか？

→通知する

Q7：一次審査はいつまでに終わるのか？

→11月末に申し込み締め切りだとすると、2週間程度で審査員を割り当て、審査員の依頼を行い、その後2週間程度で審査をお願いする。12月末くらいに審査結果を受領して、年明けに一次審査結果を応募者に通知する。

→審査員の候補者のリストは次回の秋の学会までに作っておくべき。例えばキーワード毎に候補になる人をまとめておくのはどうか。

[審査について]

2 本審査の詳細

- ・当日の審査員の選定(審査員人数と基準)

応募した学生の所属する研究室のスタッフを審査員候補とし、その中から利害問題とならないように選定する。1人の学生に対し、4人の審査員が審査を行う。

座長は予備の審査員となり、審査員の都合が悪くなったときにのみ、審査を行う。

Q8：座長を決める時期と審査員が決まる時期はどちらが早いのか？

→ほぼ同時期になってしまうことが想定されるので、座長を決める際には審査員との兼ね合いを考える必要がある。一度この方針でやってみて、座長選定に困難をきたす場合には次回以降の検討事項とする。

Q9：会場に4名の審査員がいることは、どうやって担保するのか。

→欠員が一人までならば、座長が対応する。二人以上の場合は、運営委員で対応する。

Q10: 座長はすべての発表を公平に判断できる立場なので、最初から審査員とするべきではないか？

→欠員の対応が問題になる。座長が変更になるケースは稀なので、審査員も欠員となる場合は少ないことが想定される。

→来れなくなった審査員が代わりの審査員を指名するのはどうか？利益相反を担保できない可能性がある

→前日までにわかっている場合は、座長を含めて、代わりの審査員を選定する。もし当日、2人以上の欠員が判明した場合は、領域代表、副代表、運営委員（旧運営委員を含む？）で対応する（お互いに携帯番号を交換しておく必要があるのかもしれない）。

Q11: 少数のグループでセッションが構成されている場合、競合するグループのスタッフにより採点が行われる場合が想定され、不利になるのではないか？

→審査を担当した発表に関して、適当な平均点になるように審査を依頼することで防止できるのではないか。

→もし仮に不当に低い点がつけられていたのであれば、他の審査員のコメントから判断可能であると考えられる

Q12: 審査員の選定にあたり、専門性は問うべきか？（これは一次審査の審査員の選定にも言えること）

→様々なバックグラウンドを持った人を審査員に選んだ方が良い。専門性が違う人にもわかりやすい発表ができたかどうかの方が大切ではないか？

→10分で専門が違う人にわかってもらうように話すと、本来踏み込んで議論したかった内容に踏み込めない場合があるのではないか。

→できるだけそのセッションにいることが強く期待されるような専門が近い人を選んだほうがよいと思う。専門性が異なる人を審査員に選定した場合、審査員の先生が本来聞きたいセッションにいけなくなってしまう場合が出てくるのではないか？

- 受賞者人数

4名を基準とする(1-2名の増減は可)。博士、修士、学士課程による区別はない。

受賞人数に関して、低温と磁性に枠は設けない。低温磁性を問わず、優秀な発表をした学生を選出する。

- 審査項目（全体評価のみもあり）と採点区分（何段階とするか）

A. 研究の学術的意義、

B. 口頭発表のわかりやすさ、

C. 質疑に対する回答の明確さ、

をそれぞれ 10 点満点で評価。

(点数が拮抗したときに備えて)それぞれの項目について、1、2 文程度の簡単な講評(理由)を記述する。

Q13：審査結果をどのように回収するのか？

→ウェブベースで回収するのであれば、グーグルフォームのようなものを準備すればよいのではないか？（本部に作成を依頼する？）

→紙であれば、本部に回収ボックスを用意してもらい、各審査員に提出してもらうのがよい。

→メールで回収するのはやめたほうがよい。

→セッション終了後に座長が審査結果を回収すると、審査員がわかってしまうのでよくないのではないか？

- 受賞者の最終選定について

領域代表、副代表、次期領域代表、副代表、学生賞担当、次期学生賞担当の 6 名で行う。審査委員長は副代表とする。

Q14:最終選定の時期はいつになるのか？運営委員の引継ぎの時期と重なるのではないか？

→最終日の午後にやるのがよいのではないか。最終選定の議論はメール審議はなじまない。

→もし最終審査を最終日午後にやるのであれば、審査結果をいつどのように集計するかも考える必要がある（3 日目までの分はある程度まとめておいて最終日の分だけは急いでリストを作るなどの工夫が必要かもしれない）

→審査結果の提出方法ともリンクするが、審査員に審査結果を確実に提出し

てもらおうように注意を促す必要がある

(その他について)

3-a 事前審査と本審査における審査員の重複を許すかどうか
基本的には認めないが、やむをえない場合は認める。

3-b 利益相反のある場合の取扱い

審査員は共同研究者（当該発表の共著者、および同じ研究室に所属する者）以外から選ぶ

3-c 仮賞状の発行をするかどうか

学会期間中に受賞者を決めることは困難なので、不要

3-d 表彰時期

領域 8 ホームページと物理学会ホームページで受賞者公表を行う。

次の学会のインフォーマルミーティングで表彰を行う。不参加の場合は賞状を郵送する。

(その他、項目にないことに関する質問)

Q15: 学生優秀発表賞の審査対象者であることは、プログラムに明記するのか?

→他の領域でそういったことをしていることは（聞いたことが）ない

→応募していることを知られたくない応募者がいるかもしれない。

→通常のセッションで選考するのは覆面が前提ではないのか。プログラムに記載しないほうがよい